

研究ノート

在宅看護論演習における看護学生の学び —手作り洗髪ケア用具による演習後レポートの分析—

Nursing Student's Learning through Home Care Nursing Practices
-Analysis of the Student's Reports about Exercises Using Handmade tools for Shampoo-

栗原律子

Ritsuko KURIHARA
保健福祉学部保健看護学科

キーワード：在宅看護，在宅看護論演習，看護学生，日常生活援助

抄 録

本研究の目的は、手作りケリーパッドを作成し、洗髪を実施した在宅看護論演習から学生がどのような学びを得ているのかを明らかにし、今後の演習内容および演習方法についての課題を見いだすことである。

研究方法は、A大学において平成28年度在宅看護論演習を履修し、本研究に同意が得られた51名の演習後レポートの記述内容を分析の対象とした。レポートの記述を意味内容が理解できる単位でコード化し、内容を類似性・同質性に従い分類し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。その結果、洗髪の演習で得られた学生の学びに関して以下のことが明らかになり、今後の課題が示された。

1. 演習で得られた学びは、洗髪の援助技術、在宅看護の特徴、チームの協働、訪問看護師に必要な実践能力であった。
2. グループで話し合いや振り返る時間を設けること、家庭にあるものを代用して洗髪用具を作成する演習方法は、学生にとって在宅看護の場のイメージ化につながった。
3. 日常生活援助技術演習においても、訪問看護に必要な態度や礼節・マナーを学ぶことができる可能性が示された。
4. 訪問看護師に必要な実践能力のうち、アセスメント力や判断力についての学びは得られなかった。

今後の課題は、在宅の場のイメージ化をはかりながらアセスメント力・判断力を含む学生の思考力を育み、伸ばしていけるような演習内容の工夫・検討をしていくことである。

I. 緒 言

在宅看護は、あらゆるライフステージにある人々に対して、療養者と家族が生活している場で看護ケアを提供する。そこは、療養者と家族の長い歴史がある住み慣れた場所、そして安心して自分らしく過ごせる暮らしの場であるため、常に療養者とその家族が主体であるとともに尊厳のある生活を送ることができるよう支援していくことが在宅看護の役割といえるであろう。また、近年は、医療機関における在院日数の短縮

化、高度な医療的管理を必要とする療養者や認知症高齢者、くわえて在宅での看取りを希望するものが増加するなど、在宅療養者の健康課題は複雑で多様化し、より専門性の高い看護ケアを提供する能力が社会的にも求められるようになってきている。

実際、在宅看護で行われる看護援助は療養者の日常生活の援助、医療処置管理および教育的支援、家族支援など多様であり、訪問時は看護師ひとりでのその時の療養者の状態を的確にアセスメントし、療養者の状態に応じたケアを提供する必要がある。また、その家庭

の状況に応じて援助方法や用具を創意工夫すること、経済性や家族負担にも配慮できる能力を身につけることも在宅看護技術の特徴である。そこには、療養者と家族が必要とする看護技術が安全安楽に提供できる熟練した能力だけではなく、感性や倫理観も必要になると考える。それは単に手順や留意点を頭で覚えることで身につくものではない。

A 大学保健福祉学部保健看護学科の在宅看護論演習（3年前期，2単位60時間）は，平成24年度の新カリキュラム移行時に開講し，平成28年度現在で3年目である。科目のねらいは，1. 個々の生活背景に応じた在宅看護を展開できるよう，必要な基本技術と方法論を考えること，2. 在宅で生活する療養者の生活背景に応じた日常生活援助の実践に必要な基本的看護技術を学ぶことであり，講義と演習を組み合わせで展開している。

本学の在宅看護論演習では家庭にあるものを代用してケア用品を作成し，療養者にとって安全安楽な援助方法を療養者役・看護師役をそれぞれ体験し，グループで話し合い，自分たちで考えながら工夫や試行錯誤，改良を重ねたものを実際に演習で使用している。この演習方法で3年間展開してきたが，在宅看護の特徴を押さえた看護技術を身につけ，さらに4年次の在宅看護論実習につながるよう効果的な演習展開を考えていく必要性を感じながら，未だ模索しているのが現状である。在宅看護論演習の学習成果に関する研究は，ロールプレイ，グループ学習に関するものはみられるが¹⁾²⁾³⁾，日常生活援助技術の演習によるものは少ない⁴⁾。そのため，本研究では，在宅看護論演習で手作りケリーパッドを作成し，洗髪を実施した演習から学生がどのような学びを得ているのかを明らかにすることを目的とした。また，今後の在宅看護論演習の内容および方法についての課題を見出していきたい。

II. 在宅看護論演習「在宅における生活援助技術—清潔（洗髪）演習」の概要

在宅看護論演習は，2年次後期に在宅看護概論を学習したのちに開講される3年次前期2単位60時間の講義・演習科目である。在宅看護論演習では，対象の健康障害の種類や程度，発達段階，個別性を把握し，個々の生活背景に応じた在宅看護の展開，日常生活援助の実践に必要な看護技術を学習する。日常生活援助技術においては，面接相談技術，フィジカルアセスメント，栄養・食事，清潔，排泄，安楽な体位，医療的処置管理を必要とする援助技術では褥瘡予防，在宅人

工呼吸療法，在宅酸素療法，在宅看護過程の展開では事例を用いて看護計画の立案までに行い，看護計画に基づき生活援助技術を活用したロールプレイングを実施している。

在宅における生活援助技術—清潔（洗髪）演習は，学習目標を1. 在宅における清潔ケアの援助を自宅にあるものを利用して・工夫して行う方法がわかる，2. 自宅にあるものを利用して，安全安楽な清潔ケアの援助ができる，3. 療養者にとって安全・安楽・快適に援助する方法をメンバーで試行・検討することができるとし，手作りケリーパッドの作成・洗髪の体験を通して用具の工夫・試作，実践を学ぶ内容で行った。実際の演習は以下のように展開した。

- ・演習1週間前の講義においてケリーパッド作成，用具の工夫についてのDVD視聴，演習要項およびケリーパッド作成方法のプリントを配布。
- ・演習当日，教員が新聞紙，バスタオル，輪ゴム，ポリ袋，洗濯バサミを使用した手作りケリーパッド作成のデモンストレーションを実施。
- ・学生は3～4人のグループになり，全員で心地や寝心地を体験しながら療養者にとって安全安楽快適な洗髪ができるケリーパッドを作成。
- ・グループ内で療養者役，看護師役，介助者および観察者の役割を決め，作成したケリーパッドを使用して洗髪を実施。療養者役および介助者，観察者役の学生は感じたことをその場で看護師役に伝え，より安全安楽快適に洗髪する方法をグループ内で話し合い，実施後の援助を振り返りながら改善点を検討。
- ・役割を交代し，グループ内で話し合い・検討した改善点をいかして洗髪を実施。グループの全員が患者役を体験。
- ・教員は全体のタイムスケジュール管理をするとともに，1人あたり3～4グループを担当し，ラウンドしながら学生の安全性を見守ることと学生の疑問点などに応じて助言。
- ・各グループから実施した感想，工夫した点，難しかった点，学びなどの発表および演習担当教員3名からのフィードバック・助言。
- ・演習後レポートの提出。

III. 研究方法

1. 研究対象者

本研究の対象者は，A大学において平成28年度前

期在宅看護論演習を履修している3年生54名の学生とした。

2. データ収集方法および分析方法

本研究で使用したデータは、「在宅における生活援助技術—清潔（洗髪）演習」後に提出してもらった演習後レポートである。データ収集期間は平成28年5月9日から同年5月13日であった。

分析は、レポートの記述内容を意味内容が理解できる単位でコード化し、内容を類似性・同質性に従い分類し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。

3. 倫理的配慮

本研究の対象学生に対して、在宅看護論演習の講義開始時に研究の目的、方法、内容、結果の公表について文書と口頭で説明した。また、研究への参加は自由意志であり、研究に同意したのちでも参加を取りやめることができること、参加の有無は成績には一切影響しないこと、同意が得られたレポートは個人名が特定されないように取り扱うこと、得られたデータおよび結果は研究の目的以外では使用しないことを説明し、同意書を配布した。同意書は、講義終了後に回収箱を設け提出してもらった。

IV. 研究結果

本研究の分析対象は、54名のうち同意の得られた51名(94.4%)のレポート内容とした。演習後レポートの分析から洗髪の演習で得られた学びに関して217コードあり、さらに34サブカテゴリー、11カテゴリーに分類された。11に分類されたカテゴリーは、洗髪の援助技術、在宅看護の特徴、チームの協働、訪問看護師に必要な実践能力の4つに類型化された。

洗髪の援助技術は176コード、26サブカテゴリー、7カテゴリー（表1）、在宅看護の特徴は18コード、3サブカテゴリー、1カテゴリー（表2）、チームの協働は17コード、3サブカテゴリー、2カテゴリー（表3）、訪問看護師に必要な実践能力は6コード、2サブカテゴリー、1カテゴリー（表4）であった。以下、4つの類型化ごとに結果を述べる。なお、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, コードは「 」で示す。

1. 洗髪の援助技術

【安心な援助の工夫と留意点】は<服が濡れないよう

にする>, <時間を考慮する>, <顔や耳への水はねを防ぐ>, <排水をスムーズにする>, <勢いよく湯をかける>, <安全・安楽な用具の作成>の6サブカテゴリー, 【安楽に洗髪する方法】は<汚水を流れやすくする>, <力加減を考える>, <洗い残しがないようにする>, <対象に合わせた洗い方>, <頭部を支える>の5サブカテゴリー, 【対象の安全を守る】は<湯温の調整>, <転倒・転落の予防>, <ベッド柵を用いる>, <看護師の作業領域を考える>, <環境調整>, <医療器具への配慮>, <対象者の安全確認>の7サブカテゴリー, 【個別性】は<療養者の好みに合わせる>の1サブカテゴリー, 【体位を整える】は<対象者の安楽な体位>, <援助中対象者の体位を考える>, <援助者の負担の軽減>の3サブカテゴリー, 【コミュニケーション】は<安全安楽な援助をする>, <対象者に合わせた看護をおこなう>, <コミュニケーションの大切さ>の3サブカテゴリー, 【羞恥心・プライバシーを守る】は<羞恥心・プライバシーの配慮>の1サブカテゴリーで構成されていた。「バスタオルを丸めてしっかり首元に入れないと、服がぬれ体が冷える原因となるので、気をつけたい」、「強く洗うことで、安心感があり安楽」、「湯の温度は個人差が生じるので、かけるときは毎時声をかけて確認する」、「膝下に枕などを入れて安楽な体位にする」、「療養者の羞恥心を考えて顔にガーゼを当てる」等、洗髪の基礎技術に関するものであった。

2. 在宅看護の特徴

【療養環境に応じた援助方法】は<自宅を汚さない>, <床を濡らさない>, <限られた物品で援助する>の3サブカテゴリーで構成されていた。「自宅は療養者さんやその家族の生活の場であるため、周りを汚さないように気を付ける」、「在宅で行うので、床を水で汚すことがないように気を付けていく必要がある」、「実際に訪問したときには用意があるとは限らない」等、実際に療養者と家族が生活している場をイメージした援助に関するものであった。

3. チームの協働

【グループ学習の意義】は<グループメンバーと協力する大切さ>, <グループ内の意見交換が良い援助につながる>の2カテゴリー, 【演習姿勢】は<実際に想定して演習に臨む>の1カテゴリーから構成されていた。「1人で援助すると緊張してしまい、利用者は無理な負担をかけるときもあるので、グループメン

表1 洗髪時の援助技術

カテゴリー	サブカテゴリー	コード () はコード数を示す
安心な援助の工夫と留意点	服が濡れないようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・バスタオルを丸めてしっかり首元に入れないと、服がぬれ体が冷える原因となるので、気を付けたい (3) ・首に巻くタオルの位置が上すぎてしまうと服が濡れてしまったため、位置を考えて巻く (3) ・首元にケリーパッドをフィットさせることで、もれる可能性をなくすことで、安心して洗髪してもらえる (2) ・水で首元がぬれたら不快になってしまうので、ぬれないようにするために首元をタオルで覆った (2) ・首元から濡れないとわかったら、安心して頭を洗ってもらえるため、工夫して首元から濡れないようにすることが重要
	時間を考慮する	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりやっているとう頭が冷えて寒くなる可能性があるため注意が必要 (3) ・タオルをケリーパッドの下に敷いておくなど、すぐに髪をふくことのできる用意をした (3) ・長時間同じ体勢だと相手に苦痛を与えてしまう。時間を気にしながらスムーズに行うことが大切 (2) ・時間をかけて丁寧に行うことが安楽な援助につながる ・強さ、温度、水の量、時間などに留意して実施する
	顔や耳への水はねを防ぐ	<ul style="list-style-type: none"> ・ガーゼをかけて、顔に水がかからないようにした (3) ・水が耳に入らないように気をつけた (2) ・耳に水が入ることに注意して、耳回りの泡を取っていく
	排水をスムーズにする	<ul style="list-style-type: none"> ・壁をきちんと作り、もれるかもしれないという不安を取り除く (3) ・ケリーパッドの壁をしっかりと作らなければ、バケツに汚水が流れていかにこぼれてしまうため、壁を強く作成した ・排水が流れるところを水が飛ばないように端を内側に丸め、ビニールのつなぎの部分の部分を滑らかにする ・2回目は新聞紙を丸めて芯にして汚水の通り道を作った
	勢いよく湯をかける	<ul style="list-style-type: none"> ・髪に湯をかける時に、少しずつかけると不快に感じたので、ある程度勢いよく湯をかける (3) ・お湯をある程度勢いよくかけて患者さんがしっかり髪を洗われている感じがするように行う ・お湯の勢いが弱すぎると爽快感があまりないため、水压を調整する
	安全・安楽な用具の作成	<ul style="list-style-type: none"> ・安全で療養者さんにとっても安楽で快適なものであるよう、心掛けて作ることが大切
安楽に洗髪する方法	汚水を流れやすくする	<ul style="list-style-type: none"> ・汚水が溜まって患者が不快に感じてしまわないようにケリーパッドに傾斜をつけ、水を残らずに流した (8) ・ケリーパッド内に湯をためすぎないで、清潔を維持する (4) ・汚水を流すとき、流れにくいケリーパッドの汚水が流れる側を押して汚水を流していた (2) ・髪の毛を引っ張らないように、片手で持ちながら汚水を流す (2) ・排水がうまくいくように、中央よりも端にケリーパッドを設置した
	力加減を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・強く洗うことで、安心感があり安楽 (3) ・相手の気持ちよさを感じてもらうために丁度よい力加減を考えた (3)
	洗い残しがないようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・シャンプーの洗い流しが不十分であると、頭皮にダメージをあたえてしまうため十分に洗い流す必要がある (2) ・後ろの部位がしっかり洗えているかを確認する (2) ・生えざわをしっかり洗う ・温度調節に時間がかかって、シャンプーをつけている時間が長くなると痒くなってきて爽快感が得づらくなる
	対象に合わせた洗い方	<ul style="list-style-type: none"> ・髪の長さによって洗い方を工夫する (2) ・長い髪の方は毛先に泡を立て、そのまま頭皮のどこまでもってくると洗いやすい ・髪が長い人は、ある程度まで髪についた泡をとってから髪をすすぐようにする ・洗髪した後に快感を感じてもらえるように考えながら洗髪することで安楽にもつながる
	頭部を支える	<ul style="list-style-type: none"> ・頭の下を洗うとき頭を支えることによって安楽につながる ・頭を支え患者にはリラックスしてもらう必要がある
対象者の安全を守る	湯温の調整	<ul style="list-style-type: none"> ・湯の温度は個人差が生じるので、かけるときは毎時声をかけて確認する (5) ・44℃は熱すぎるので、患者に温度を聞くことが大切だと感じた (2) ・患者の立場からは、お湯の温度が高く熱いと感じていても言い出しにくい (2) ・予め患者に湯温を確かめてもらい、やけどしないように予防する (2) ・湯はやけどの原因となるために温度に対して敏感になる必要がある (2) ・湯の温度は、療養者さんに好みを聞いてから用意する ・44℃は熱く、適温は人によって違うことがわかった
	転倒・転落の予防	<ul style="list-style-type: none"> ・療養者の体を斜めにするによって、まっすぐのままベッドサイドに寄せるよりも転落の可能性が低くなる (2) ・湯を汲むときもできるだけ療養者から目を離さず、転落をしないようにする (2) ・床が濡れたままでは転倒の危険性がある
	ベッド柵を用いる	<ul style="list-style-type: none"> ・ベッド柵をつけて安全を確保する (3) ・柵を利用することも大切だ
	看護師の作業領域を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・効率性を考えた準備、物品の配置をする (2) ・看護師の作業領域を考えて行うことで、患者の安全を守る援助ができる ・作業領域を考えてベッド柵の場所をずらしたりすることで援助が行いやすくなる
	環境調整	<ul style="list-style-type: none"> ・療養者が暑くないか寒くないかを確認し、状態にあわせて布団をかけたり安楽な状態にする (2) ・室温を考えて綿毛布やタオルケットの有無を考える必要がある
	医療器具への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・必ずケアの後は、医療器具などがはずれていないか確認する ・カテーテルなどを濡らしてしまうことがないように、ビニール袋などを活用する
	対象者の安全確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ベッド柵を外すとき、療養者の手の位置を確認する ・一部だけに注意を向けるのではなく自分の動きを含めた全体に目を向けて援助をする必要がある

個別性	療養者の好みに合わせる	<ul style="list-style-type: none"> ・療養者さんに合わせて枕の高さやお湯の温度を変えることも重要だと思った (7) ・療養者の首の太さ、わん曲を考えて新聞紙の枚数やタオルの枚数などを考え、個別性に合わせた援助を行う (7) ・人それぞれ、好きな位置や感じ方の違いもあるということも学ぶことができた (4) ・ケリーパッドのやわらかさや高さの好みは人それぞれなので、患者と一緒に調整する (3) ・体型や体の状態によっても必要な援助がちがうので、安全安楽をつねに意識して援助する (2) ・相手が不快だったらそこで修正すればいいので、自分だけの主観で最後まで行わない ・安全安楽快適な援助を行うためには、療養者の個性を考えて行う
体位を整える	対象者の安楽な体位	<ul style="list-style-type: none"> ・膝下に枕などを入れて安楽な体位にする (9) ・長時間同一体位にならないようにする (3) ・体位を工夫して安楽に洗髪できるようにする (3) ・膝の下に枕を入れたり、体をななめにするなど、療養者の状態にあわせるなど個性を考える
	援助中対象者の体位を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・援助しているときの対象者の体位にも注意する ・長時間同じ姿勢でいてもらうため、患者さんにも身体への疲れがある ・今回の演習は体位をあまり考えずに行ってた
	援助者の負担の軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の腰の負担を軽減するポジショニングも考えながらおこなう
コミュニケーション	療養者の状態を確認する	<ul style="list-style-type: none"> ・「お湯の温度はどうですか?」「かゆい所はないですか?」「寒くは感じませんか?」と問いかけながら進める (5) ・療養者さんの表情の観察、言動、療養者さんからのフィードバックをもらうことが必要である (2) ・一つ一つの動作を行うたびに、声かけを行うことで療養者が安全安楽な洗髪ができる
	対象者に合わせた看護をおこなう	<ul style="list-style-type: none"> ・声かけを行うことで、療養者に合った個性のある看護を行うことができる (3) ・声かけは対象者に合わせて、かゆい所がないか、次はどのような動作を行うかなどは言う
	コミュニケーションの大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・作業だけに集中するのではなく、コミュニケーションをとりながら援助をしていくことが大切
羞恥心・プライバシーを守る	羞恥心・プライバシーの配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・療養者の羞恥心を考えて、顔にガーゼを当てる (4) ・プライバシーに配慮してカーテンをする

表 2 在宅看護の特徴

カテゴリー	サブカテゴリー	コード () はコード数を示す
療養環境に応じた援助方法	自宅を汚さない	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅は療養者さんやその家族の生活の場であるため、周りを汚さないように気を付ける (3) ・在宅だとじゅうたんや畳ということもあるので、ぬらしたり、汚したりしないよう気をつけていきたい (3) ・少しでもぬれていたら迷惑がかかると思うので療養者に配慮しながら、床や枕がぬれていないかなど環境にも配慮する (2) ・洗髪に限らず、部屋を汚さずに援助を行いたい
	床を水で濡らさない	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅で行うので、床を水で汚すことがないように気を付けていく必要がある (4) ・湯が飛び散らないように加減に注意する ・水びたしは見た目もよくないし、転倒の危険にもつながる
	限られた物品で援助する	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に訪問したときには用意があるとは限らない ・在宅では物品を療養者さんの家庭のものなので、あまり無駄(多く)には使えない ・できるだけ少ない水と洗濯物で洗髪を行えるようにしなくてはならない

表 3 チームの協働

カテゴリー	サブカテゴリー	コード () はコード数を示す
グループ学習の意義	グループメンバーと協力する大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・1人で援助をすると緊張してしまい、利用者にも無理な負担をかけるときもあるので、グループメンバーでの協力は大切 (3) ・グループの全員で協力して実施者を手伝うなどが大切 (2) ・1人で何かを行うより、誰かと協力すると色々なことができる ・途中で物品不足に気づいたが、グループ内の連携が取れていなかったため改善が必要
	グループ内の意見交換が良い援助につながる	<ul style="list-style-type: none"> ・グループのメンバーで気付いたことの見聞交換をし合うことで、安全安楽快適な援助につながる (2) ・グループでの積極的な意見の出し合いがより良い援助につながる (2) ・ケリーパッド作成時も様々な意見がでて、より良いケリーパッドを作成できた (2) ・グループ内で工夫を出し合うことができ、自分1人ではおもいつかないようなことができた
演習姿勢	実際に想定して演習に臨む	<ul style="list-style-type: none"> ・演習も1人の療養者さんの家で援助を行なっているという気持ちで、1つ1つの動作やマナーを守って演習に臨んでいきたい (2) ・学生同士とはいえ、患者役になった人は、患者として看護を行わなければ、実践的な演習にならない

表 4 訪問看護師に必要な実践能力

カテゴリー	サブカテゴリー	コード () はコード数を示す
実習に向けての自己課題	より良い援助の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・どの援助を行うにも、その人に合った援助をするためにも様々な試行錯誤をすることが大切だと感じた ・今後の実習で色々アイデアを出して援助につなげていけたらいいと思った ・自分自身で考え、よりよい援助をすることができるようにしていきたいと思った ・実習を行う時には、療養者の視点に立って援助ができるように気をつけながら取り組みたい
	技術力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・常に患者に意識を向けられるように余裕が持てるように練習を重ねていくことが重要である ・後頭部を洗うとき頭を持ち上げてもらわなければならないときもあったので、看護師として1人でできるようにしたい

バーでの協力は大切」、「グループでの積極的な意見の出し合いがより良い援助につながる」、「学生同士とはいえ、患者役になった人は、患者役として看護を行わなければ、実践的な演習にならない」等、グループで演習することによるメリットや演習意欲に関するものであった。

4. 訪問看護師に必要な実践能力

【実習に向けての自己課題】は<より良い援助の実施>、<技術力の向上>の2サブカテゴリーで構成されていた。「どの援助を行うにも、その人に合った援助をするためにも様々な試行錯誤をすることが大切だと感じた」、「自分自身で考え、より良い援助をすることができるようにしていきたいと思った」、「常に患者に意識を向けられるように余裕がもてるように練習を重ねていくことが重要である」等、今後自分自身のめざす姿、身につけたい能力に関するものであった。

V. 考 察

1. 洗髪の援助技術

洗髪の援助技術において【安心な援助の工夫と留意点】、【安楽に洗髪する方法】、【対象の安全を守る】、【個別性】、【体位を整える】、【コミュニケーション】、【羞恥心・プライバシーを守る】ことを学んでいた。これらは1年次の基礎看護学で学んだ知識や技術であり、必ずしも在宅看護における特徴的なものではない。しかし、在宅看護技術は、基礎看護技術と臨床看護技術を応用した技術である⁵⁾といわれているように、在宅で生活する多様なニーズをもつ療養者やその場の状況に応じた援助を自ら考え工夫して実施することが求められるため、基礎看護技術がしっかりと身につけていなければならない。在宅看護に限らず、確実な技術を身につけて安全安楽に実施できることは、看護師にとって必要なスキルであり、本研究において得られた学生の学びは基礎看護学の知識や技術を理解し

ていることを裏付けるものとする。

学生は、「バスタオルを丸めてしっかり首元に入れないと、服がぬれ体が冷える原因となるので、気を付けたい」、「汚水が溜まって患者が不快に感じてしまわないようにケリーパッドに傾斜をつけ、水を残りづらくした」、「相手が不快だったらそこで修正すればいいので、自分だけの主観で最後まで行わない」など、自分の援助(行動)の根拠づけをし、さらに療養者にとって安全安楽な援助を考え、療養者主体の看護を実践していた。実施した援助をグループ内で振り返り改善点を検討することによって自分以外の意見や考え方を知り、自分たちでよりよい援助方法を追求することにつながっていったと考えられる。また、「一部の方に注意を向けるのではなく自分の動きを含めた全体に目を向けて援助をする必要がある」という学びは、在宅看護において療養環境や家族などの生活状況を広くアセスメントする上で重要な視点といえる。基礎看護学で得た知識・技術を活用し発展させた学びができていたといえるであろう。在宅看護論実習で学生が経験する看護技術は日常生活援助技術がほとんどであり、既習の基礎技術の定着はもちろんのことであるが、今後は実習場面を具体的にイメージして実践できるような演習の工夫も必要であると考えられる。

2. 在宅看護の特徴

在宅看護の特徴のひとつは、看護が提供される環境が病院とは大きく異なる点である。それは、看護師が対象となる療養者とその家族が生活している場に出向いてケアをするということである。そのため、病院での実習しか経験していない学生にとって、在宅看護の対象像のイメージは、生活体験の乏しさや演習時の段階で在宅看護実習を経験していないことから難しい状況にある⁶⁾といわれている。本研究の対象である学生においても、在宅看護に関する学習は2年次に履修した在宅看護概論の講義のみであり、実際の在宅看護の場をイメージすることは容易ではないと考える。

しかし学生は、「自宅は療養者さんやその家族の生活の場であるため、周りを汚さないように気を付ける」、「在宅だとじゅうたんや畳ということもあるので、ぬらしたり、汚したりしないよう気をつけていきたい」、「水びたしは見た目もよくないし、転倒の危険にもつながる」など療養者と家族の生活している場をイメージし、〈自宅をよごさない〉援助方法について学んでいたことが明らかになった。今回の演習では、グループ内で1人の洗髪が終わるごとに援助を振り返り、療養者にとってより安全安楽快適に洗髪する方法を自由に話し合いながら改善点を検討する時間を設けた。役割を交代しグループの全員が患者役を体験することによって自分たちの援助をそれぞれの役割から振り返り、療養者や家族の立場になって安全安楽な援助を様々な視点から考えることができたと推察される。そのため、療養者と家族が生活している場を具体的にイメージすることができ、生活の場が汚れてしまうという環境面に視点を広げて、自分たちの援助の影響に気づくことができたと考えられる。

さらに、在宅での看護援助を考える上では、使用物品などは、病院で使用している用具にこだわらず、できるだけその家庭にあるもので代用すること⁷⁾も重要である。実際に家庭にあるもので洗髪用具を作成し、使用中で「実際に訪問したときには用意があるとは限らない」、「在宅では物品を療養者さんの家庭のものなので、あまり無駄（多く）には使えない」などく限られた物品で援助する〈必要性に考えを発展させることができていた。学生は、演習を通して在宅看護の場の特徴を学ぶことができたといえるであろう。このことは、在宅という生活の場とそこでの生活を具体的にイメージしなければ気づけない視点であり、訪問看護の初学者に不足が指摘されている「生活をみる力」⁸⁾を養うことにつながっていることが示唆された。

3. チームの協働

正野らによると、在宅看護は療養者・家族を含めたチームケアであり、多職種との協働でおこなわれるものである⁹⁾。また、王ら¹⁰⁾は、訪問看護師には他職種との連携による問題解決能力が必要であることを指摘しており、療養者・家族がもつ多様なニーズに応じた生活を支援するためには多くの人々との連携と協力が必要である。

学生はこれまでも講義や演習を通してグループワークを経験してきているが、本演習において「1人で援助すると緊張してしまい、利用者に無理な負担をかけ

る時もあるので、グループメンバーでの協力は大切である」、「1人で何かを行うより、誰かと協力するといろいろなことができる」と、改めて〈グループメンバーと協力する大切さ〉について体験的に学んでいた。また、グループ内でメンバーと様々な考えや意見交換をすることでより良い援助や1人では思いつかないようなことができた体験は、保健・医療・福祉の異なる専門家と連絡調整をはかりながら療養者・家族の多様なニーズと価値観を尊重し支援していく在宅看護に必要な能力の育成につながると考えられた。さらに、学生は経験したことがない生活の場において看護を実践するためのマナーや、実際の訪問場面をイメージしたより実践的な演習の必要性について学んでいた。訪問看護に求められる態度やマナー、礼儀に関する学習成果は、ロールプレイによるものは先行研究で明らかになっている²⁶⁾が、詳細な場面設定がない日常生活援助技術演習においても訪問看護師に必要な態度・マナーを身につける学習ができる可能性が示唆された。

4. 訪問看護師に必要な実践能力

王ら¹⁰⁾は、訪問看護師に求められる能力のひとつに利用者の生活場面で看護過程を展開する能力を明らかにしている。訪問看護師はひとりで訪問してケアを提供する機会が多い。そのため、限られた訪問時間の中で様々な情報を得て、多角的にかつ的確にアセスメントするとともに療養者と家族の置かれている状況に応じた看護ケアを提供することが求められる。学生は「どの援助を行うにも、その人に合った援助をするためにも様々な試行錯誤をすることが大切だと感じた」、「自分自身で考え、より良い援助をすることができるようにしていきたいと思った」、「常に患者に意識を向けられるように余裕もてるように練習を重ねていくことが重要である」など〈より良い援助の実施〉、〈技術力の向上〉をめざす必要性を見出していた。療養者に対して援助を実施する際には、アセスメント力や判断力が求められるが、本研究ではその学びは明らかにならなかった。ロールプレイのように詳細な看護場面を設定した中で洗髪の方法を考えて実施する演習内容でなかったことも一因と考える。この時期、学生は各領域で後期から始まる領域実習に向けてペーパーバイシエントによる看護過程の展開に取り組んでいる。学生が不得手とする看護過程の展開に必要な思考力は、普段の講義や演習でも育むことができる。むしろ、繰り返していくことで高められていくものであると思われる。今後、演習の中で思考力を高められるよ

うな内容を検討していくことが課題である。

VI. 結 語

在宅看護論演習の自作のケリーパッドを用いた洗髪演習における学生の学びについて以下のことが明らかになった。

1. 演習で得られた学びは、洗髪の援助技術、在宅看護の特徴、チームの協働、訪問看護師に必要な実践能力であった。
2. グループで話し合いや振り返る時間を設けること、家庭にあるものを代用して洗髪用具を作成する演習方法は、学生にとって在宅看護の場のイメージ化につながった。
3. 日常生活援助技術演習においても、訪問看護に必要な態度や礼節・マナーを学ぶことができる可能性が示された。
4. 訪問看護師に必要な実践能力のうち、アセスメント力や判断力についての学びは得られなかった。

今後、在宅の場のイメージ化をはかりながらアセスメント力・判断力を含む学生の思考力を育み、伸ばしていく演習内容の工夫・検討が課題である。

最後に、本研究にご協力くださいました学生の皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 鷹井樹八子, 中尾理恵子, 門司和彦, 石原和子: 在宅看護論実習前のロールプレイにおける看護内容評価と教育的効果, 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 14 (1), 111-116, 2001.
- 2) 横堀ひろ, 小笠原映子: 看護基礎教育における教授方法の工夫—在宅看護領域における演習科目の授業展開—, 群馬パース大学紀要, 16, 21-27, 2013.
- 3) 荻野妃那, 春名誠美, 豊島泰子: 在宅看護学における学生の学びの検討—演習を通して—, 四日市看護医療大学紀要, 9 (1), 35-40, 2016.
- 4) 能川ケイ, 西浦郁絵, 服部素子, 大野かおり: 在宅看護技術の授業デザインと展開, 神戸市看護大学短期大学部紀要, 23, 33-45, 2004.
- 5) 正野逸子, 本田彰子編: 看護実践のための根拠がわかる在宅看護技術 (第3版) p.7, メヂカルフレンド社, 2015.
- 6) 西崎未和, 菊地珠緒, 蓮井貴子: 在宅看護論演習における授業方法とその学習成果に関する文献研究, 川崎市立看護短期大学紀要, 13 (1), 11-16, 2008.
- 7) 前掲書 5) p.3.
- 8) 川越博美, 櫻井雅代, 佐々木静枝, 山田雅子, 棚橋さつき: 在宅看護を教え・学ぶために—基礎教育と訪問現場の経験者からの提言—, 看護教育, 53 (6), 486-493, 2012.
- 9) 前掲書 5) p.3-4.
- 10) 王麗華, 木内妙子, 小林亜由美, 矢島正榮, 小林和成, 園田あや他: 在宅看護現場において求められる訪問看護師の能力, 群馬パース大学紀要, 6, 91-99, 2008.